



第 16 回

星月夜

フィンセント・ファン・ゴッホ

キャンヴァス、油彩 73.7×92.1cm 1889年
ニューヨーク近代美術館蔵(アメリカ)

宇宙は本来「いのち」に満ちている

画家は見た通りを描くわけではないが、想像に任せるのでもない。ゴッホの「星月夜」が私たちの心を打つのは、そこに「真実」が描かれていると感じるからである。

夜空を満す星々と月の光。渦のような光の流れは、リアリズムではないが、かと言ってゴッホの空想だと片付けられるわけでもない。

一番明るいのは金星と推定され、実際にゴッホがこの絵を描いた頃に見えたはずだとされる。光の渦は、当時天文学者によって明らかにされたつつあった「星雲」の構造について、ゴッホが何らかの知識を持っていたことの表れだとする説もある。

科学的な検証も大切だが、肝心なことは、ゴッホにとって、夜空がそのように見えたということだ。そこにはゴッホ自身の体験や感性も投影されているし、人類全体の共通経験もある。「星月夜」は、私たち自身を映す鏡なのだ。

ヨーロッパでは「死」の象徴ともされる糸杉。その細長い影の向こうに広がる星空の光の横溢は、まるで、死後、命は宇宙に還っていくという信念を表現しているようにも思われる。宗教的高揚さえ感じられる。

人間の脳は、ありのままに世界をとらえるだけではない。神経細胞の活動は、さまざまな表象を生み出す。それらはすべて「脳内現象」でもある。現実には、脳が「絵づくり」の中で生み出した仮想に過ぎない。仮想が多くの場合現実と一致するからこそ、私たちは日常生活を営むことができる。しかし、仮想は本来、現実だけに制約されるのではない。

優れた芸術作品の恵みは、仮想の本来の自由に気づかせてくれることにある。そこには、現実とは異なる意味での、私たちの心にとっての「真実」が投影されているのだ。

弟のテオとの書簡でもわかるように、ゴッホは生涯、真摯に芸術を追求した人だった。一時期共同生活をしていたゴーギャンとのやりとりでは、ゴーギャンがより「抽象」の表現を志向するのに対し、ゴッホはあくまで自然を描きたいと主張した。

「星月夜」に描かれているのは、ゴッホにとっての自然であり、この宇宙のありさまである。宇宙は本来「いのち」に満ちている。生物と無生物の違い、生と死の境界を超えた「いのち」。それを描くからこそ、「星月夜」は傑作である。

茂木健一郎
もぎけんいちろう

1962年東京都生まれ。脳科学者。東京大学大学院物理学専攻課程修了、理学博士。「クオリア」(感覚の持つ質感)をキーワードとして、脳と心の関係を探究している。絵画への造詣も深く、著者に「モナリザ」に並んだ少年—西洋絵画の巨匠たち」(小学館)など多数。